

エッセイ

スポーツ嫌い

浦野 裕司

スポーツは嫌いです

今、「スポーツが好きですか、嫌いですか」と問われるとしたら、「嫌いです」と答えるだろう。

理由の一つは、東京オリンピックを巡る「たごたごたにある。五輪招致に関する買収疑惑、国立競技場やエンブレムの問題、知らぬ間にどんどん増えて行った予算、スポンサー契約を巡る汚職などなど。スポーツの世界の純粋さを汚す、汚濁にまみれたイベントとなってしまった。

二つ目は、国民の祝日である「体育の日」が「スポーツの日」に変わったことだ。実はこちらも、東京オリンピックとの関連があるようだ。

国民の祝日に関する法律の改正によって、二〇二〇年一

月一日付で「体育の日」は「スポーツの日」へと改められた。もともと一九六四年の東京オリンピック開会式の日を記念して定められたのが体育の日である。それが、気が付けばスポーツの日に。ただの名称の変更のようだが、その位置づけは異なる。体育の日は「スポーツにしたいしみ、健康な心身をつちかう」だったのに対し、スポーツの日は「スポーツを楽しみ、他者を尊重する精神を培うとともに、健康で活力ある社会の実現を願う」とある。体育の目が目指すのは個人的で純粋なものだったのに比べ、スポーツの日は最終的に「社会の実現」へと向かう。

そのための伏線が、二〇一一年に制定されたスポーツ基本法前文に示されている。

「国民生活における多面にわたるスポーツの果たす役割の重要性に鑑み、スポーツ立国を実現することは、二十世紀の我が国の発展のために不可欠な重要課題である。ここに、スポーツ立国の実現を目指し、国家戦略として、スポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進するため、この法律を制定する。」（スポーツ基本法前文より一部抜粋）

スポーツの語源をたどれば、どうやら「遊び」に通じるらしい。それが今の我が国では、スポーツ立国を目指すための国家戦略に組み込まれてしまったのである。スポーツに関する施策が国家戦略になったがゆえに、東京オリンピックを巡る数多くの問題が起きてしまったのかもしれない。いきなり固い話題になってしまった。エッセイらしく、私個人の話題に移ろう。以下は個人的な意味での、スポーツ嫌いの三つ目の理由あれこれである。

跳び箱は嫌いだ

運動会の徒競走はたいいていビリ。スポーツがあまり得意ではなかった私は、いわゆる「どんくさい子」だった。それでも缶蹴りや馬乗り、ドッジボールなどをして遊ぶ、こ

くありふれた昭和の子どもだった。そんな私が忘れられぬ恐怖体験をしたのは、小学5年生の体育の授業だった。

その日は校庭で跳び箱をやっていた。全校三十六クラスの大規模校だったから、体育で体育館を使える時間などめったにない。開脚跳びを幾度か跳んだ後、抱え込み跳びになった。足を胸に抱え込むようにして、跳び箱を越さなければならぬ。開脚跳びよりもはるかに難しい技だ。

どんくさい子が不安を抱いて跳び箱に臨めば、助走も踏切も中途半端になる。「あつ」と思った時には顔から地面に落ちていた。校庭の固い地面に頭から突っ込み、顔面には酷い擦り傷。それ以来、跳び箱には不安感どころか恐怖感が植え付けられてしまったのである。

少年野球も嫌いだ

どんくさいながらも子どもの頃は、私なりに遊びとしてのスポーツを楽しんでいた。サザエさんの弟カツオのごとく、学校から帰ると玄関にランドセルを放り投げ、野球帽を被り、バットとボールを持って近所の原っぱへ走る。そして数人集まれば、日が暮れてボールが見えなくなるまで野球に興じるのが常だった。

原っぱでやる野球は、不自由なことがたくさんあったけれど抜群に楽しかった。まず集まったメンバーで、その試

合だけの特別ルールを決める。原っぱに十八人も集まることなどまずありえない。当然、特別ルールが必要になってくる。特別ルールであれば、たとえ四人しか集まらなくても二対二でゲームは成立する。

原っぱ野球には想像力が欠かせない。二人ずつのチームでは、ピッチャー以外に野手は一人。キャッチャーは相手チームがやったとしても、内野も外野も一人で守なければならぬ。いくらなんでも内外野を一人で守れるはずがないから、そこに特別ルールが生まれる。打球の行方によって「今の当たりはショートゴロ」、「あそこに飛ばば三塁打だ」などと、話し合いで解決するのである。

連続ヒットでランナーが二人出てしまえば打者がいなくなる。そんな時は透明ランナーという名の代走を置いて、先にヒットを打った者がバッターボックスに戻り打者になる。透明ランナーがアウトになるかセーフになるかは、みんなの想像力次第。「二点タイムリーだ」、「いや今の当たりなら、二人目のランナーはホームでアウトだ」などと主張し合う。

揉めそうなところだが、みんな早く自分が打席に立って打ちたいものだから、適当なところで折り合いをつけてゲームは進んで行く。想像力と調整力を存分に働かせることによって、いつだってゲームは混乱を招かず成立した。こ

のやり方に慣れれば、たとえ一対一であっても相手さえ居れば野球が結構楽しめたのである。日が暮れてボールが見えなくなるまで熱中した日々が懐かしい。

ところが、である。楽しくて仕方なかった野球が、少年野球チームに所属した途端、楽しいものではなくなってしまう。当時テレビで流行っていたのが「巨人の星」。団体スポーツに関して、軍隊のような古い体質が連綿と続いていたところへ「巨人の星」の登場である。我慢を強いる「ど根性野球」の風土を少年野球に根付かせたのは「巨人の星」に間違いあるまい。

私のように運動があまり得意ではなく体力もあまりなかった子どもにとっては、当時の少年野球は難行苦行の連続だった。監督は「ど根性野球」の実践者。「うさぎ跳び十周！」などはましな方で、「しつかり目を開けて捕球すれば怖くない、根性で捕れ！」と怒鳴り、ほんの六、七メートルほどの近距離からノックする。「はい！」と元気よく答えながらも、心の中では「怖いに決まってるじゃん。怖くなきゃ目なんかつぶらないよ！」と呟いていた。

エラーをすれば「何やってんだ、へたくそ」と怒鳴られる。三振すれば次は代打を送られる。いつも「失敗しちゃいけない」と思っただけの緊張ばかり。その緊張が、さらにエラーや三振を誘発するという悪循環にはまっていた。

練習以上にきつかったのは、水を飲ませてもらえなかったことだ。真夏の練習は最悪だった。口の中はカラカラになり、頭はぼうっとしてくる。何かといえば「水分補給」が叫ばれる今なら間違いない虐待行為だが、「水を飲むとバテる」というのが当時の常識。小学校の遠足でさえ、「山頂に着くまでは水を飲むな」と言われた。

剣道はもつと嫌いだ

「水を飲むな」には、高校でも苦勞させられた。

高校に入学した私は、経験もなく体力も無いのに、何を思ったか剣道部に入学してしまった。中学校の部活やそれ以前からの経験者は五人。未経験者もたしか五人だったと思う。初心者の私は、早く経験者に追いつこうと必死に取り組んだものの、経験の差は縮まるべくもなく実力の差は開くばかり。団体戦は五人が選手になれるが、経験者が五人では、選手になるのは難しい。私はいつも六番手か七番手で、補欠がやつとのこと。結局、高校在学中に公式の試合に出ることは叶わなかった。

それでも昇段試験を目標に、稽古は休まず参加した。きつかったのは暑さが厳しくなつてから。厚手の胴着に長い袴、胴・垂れ・面・小手の防具四点セットを身に付けて行う稽古だから、少し動いただけでも汗が滴り落ちる。にも

かわかわらず、練習中は休憩時も含めて一滴たりとも水を飲ませてもらえない。夏の合宿では、脱水が激しかったためか血尿まで出てしまった。そのことをだれにも言えず、自己防衛するしかない。翌日の稽古では、休憩時間に口を開けて顔を洗い、わずかな水が口に入つて来るのをこっそり飲み込んで危機を逃れた。

高校の運動系の部活について、体罰やら不祥事やらのニュースが喧しい。各種スポーツの中で、強豪校と呼ばれる学校に嫌な話が多いのは、必然の結果なのかもしれない。スポーツは本来楽しむものなのに、私には「苦しいもの」・「耐え忍ぶもの」・「理不尽なもの」等のイメージが付き纏うである。

弓道は…好きだ

話は中学時代に遡る。スポーツには嫌な思い出が多いのだが、そんな中で唯一、今もその楽しさを懐かしむことができるのが、部活で取り組んだ弓道である。

授業が終わるとすぐに弓道場に直行。顧問の先生や先輩たちが、丁寧に弓の引き方を指導してくれたので、夏には一人前に弓が引けるようになった。

弓道は、いつも心静かに取り組めるものだった。他者との戦いではなく自分自身との戦いであり、肉体は鍛えなが

らも極めて精神的なスポーツだからだろう。

もちろん、他者と戦う試合の類のものもあるにはあった。唯一の試合の場は市民体育大会だ。といっても、市内で弓道部のある中学は我が校のみだったから、中学生の部の場合は三チームを組んでの校内戦となった。毎年、たいして嬉しくもないメダル独占が続いたの言うまでもない。

そんな市民大会だったが、多摩川の河川敷で行われた遠的の個人戦は、生涯忘れられないものとなった。六十mほど先にある直径一mの的をめがけて放った矢が、青空を切り裂くように弧を描き、的に向かう。四本連続して的中させた時の、周囲の大人たちの歓声は今も忘れられない。私のささやかなスポーツ経験の中で唯一、輝くことのできた場面だ。

好きと嫌いを分けるもの

スポーツに関して、好きと嫌いを分けるものは何なのだろうか。いろいろなスポーツをほんの少しずつつまみ食いしてきたような私に、偉そうなことは言えない。それでも間違いないと思えるのは、楽しめるかどうかということ。そして主人公が自分であるということ。この二つに尽きるのではないかと思う。

こんなことを考えていた時に偶然に観た、スピードスケ

ートの小平奈緒さんの引退会見。これには、心からの感動を覚えた。

以下は、朝日新聞電子版に掲載された小平奈緒さんの引退会見でのやり取りの一部である。

— 今後、子どもたちに伝えていきたいことは。

「一緒に競い合う仲間をリスペクトすること。そして、違う文化、言語、思考などに接する中で違いを分かろうとすること。あと、数字や順位で自分や人の価値を決めつけないでほしいということ伝えていきたい」

— 追求してきたこととは。

「順位や記録は手段に過ぎなくて、目的には必ず『唯一無二の自己表現』というのがあったと感じます。それは生きる軸としてどっしりと自分の中でゆるがないものとしてある。その表現というのは、スケートを通しては全うできたんじゃないかなと思います」

— 二〇三〇年の札幌五輪招致に向けた活動には関わるか。
「いま競技とは少し距離を置きたいというのがある。シンボルアスリートとして招致に協力してほしいという要望もあるんですけど、競技力とかオリンピックとかではなくて、もう少しスポーツの純粹な楽しさというのをもう一度、私自身も考えてみたいので、札幌オリンピック

のことに関してはいったん置いておいてみるところです」

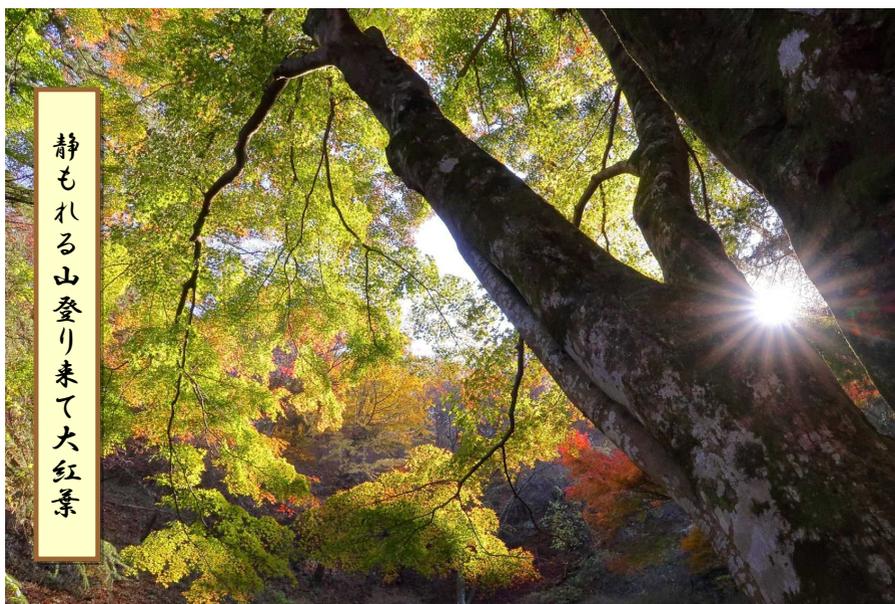
―スポーツの楽しさとは。

「人生を豊かにするものがスポーツであってほしいというのが、私がすごく大切にしたいところなんです。いろんな問題を耳にすることはあるんですけど、勢いで、わーっと盛り上がってしまうのではなくて、私自身も一度、冷静にスポーツのあり方を考え直す必要があると思います」

小平さんの一つ一つの言葉が心に沁みる。

今の私にとって最高の楽しみは、カメラを携えて山歩きをすること。体力に余裕を残しつつ、のんびり山道に行く。周囲には季節ごとに彩を変える木々や野草がある。晩秋の雑木林を風が横切ると、カラカラと乾いた音を立てて落葉が降って来る。そんな情景の一つ一つを、カメラで切り取っていく。カメラで写しきれないものは俳句に詠む。

このような山歩きがスポーツの仲間に入れてもらえるならば、私はスポーツが・・・大好きである。



静もれる山登り来て大紅葉